

■月読尊と徐福

◆日本書紀の一書に、**月読尊**が**大宜都姫**を切ったという説がある。(第五段十一書)

(※古事記では、**素戔鳴尊**が**大宜都姫**を切ったことになっている。)

紀元前210年頃、**徐福**は童男童女3000人・百工（職人）と共に、新種の稲苗、穀物の種（五穀の種）を、**秦国**から持参した。

※仮に、**月読尊** ⇨ **徐福（農耕・暦の神）**とすると、

徐福は、**始皇帝**から**高天原（＝剣山）**への捧げ物を、**阿波の大宜都姫**に拒否されたので、切ったのではなかろうか？

(注) **大宜都姫**は、外来種の蔓延を危惧した。

(⇒ 比較：昨年2月、遺伝子組み換えの種子法が廃止。)

その後、**大気都姫（大月）**は、**保食の神**として復活している。

(注) **神産巢日神**は、**大宜都姫**の亡骸を拾い集め埋葬した。

その後、粟・稗・麦・豆など、新種の穀物が生えてきた。

『日本書紀』神代紀[wiki 参照]

日本書紀・神代紀の第五段では、本文で「日の光に次ぐ輝きを放つ月の神を生み、天に送って日とならんで支配すべき存在とした」と簡潔に記されているのみであるが、続く第一の一書にある異伝には、伊弉諾尊が左の手に白銅鏡を取り持って**大日靈尊（天照大神）**を生み、右の手に白銅鏡を取り持って**月弓尊（月読命）**を生んでいる。

ツクヨミの支配領域については、天照大神と並んで天を治めるよう指示されたとする話が幾つかある。その一方で、「**滄海原の潮の八百重を治すべし**」と命じられたという話もある。

書紀・第五段第十一の一書では、天照大神から**保食神**（うけもち）と対面するよう命令を受けた月夜見尊が降って保食神のもとに赴く。そこで**保食神は饗応として口から飯を出したので、月夜見尊は「けがらわしい」と怒り、保食神を剣で刺し殺してしまう**。保食神の死体からは牛馬や蚕、稲などが生れ、これが穀物の起源となった。天照大神は月夜見尊の凶行を知って「**汝悪しき神なり**」と怒り、それ以来、日と月とは一日一夜隔て離れて住むようになったという。これは「日月分離」の神話、ひいては昼と夜の起源である。

一方、古事記では同じ展開で**食物の神（大気都比売神・おほげつひめ）が刺されるが、それをやるのは須佐之男命である**（[日本神話における食物起源神話](#)も参照）。

この相違は、元々いずれかの神の神話として語られたものが、もう一方の神のエピソードとして引かれたという説がある。

◆伊弉諾の国生みと、神生みは、徐福来日の影響だろうか？

※記紀の物語は、徐福が来た頃から、急に伊弉諾の子孫が多く生まれる。

徐福の童男童女を月読の系統にすると、秦の始皇帝による冊封（＝支配）となるだろう。

記紀は伊弉諾の子孫を増やすことによって、大和民族と漢民族は別の民族であるとした。

記紀の系図では、**月読尊**を一人神として、子孫無し。

<考察>

徐福は、BC219年、済州島を経由して、北九州に上陸した。

日本側の受け手は、安曇氏、伊弉諾尊、布都尊あたりか。

徐福は、農耕・医療分野だけでなく、始皇帝の統治方法を素戔鳴の父親（布都）へ伝えたと思われる。



(最初)：福州から船で向かうも、鯨の大群に会い、渡航失敗。

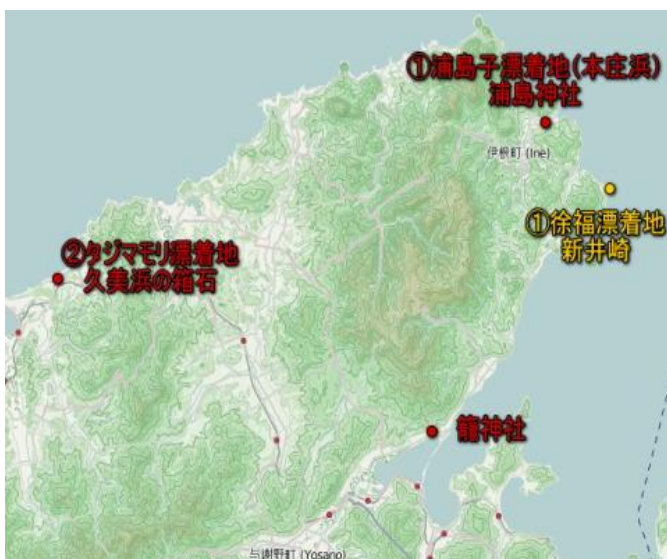
一回目：BC219 会稽から船で済州島に上陸後、日本海側を、壱岐から若狭へ。

二回目：BC210 山東半島から3000人が佐賀に上陸後、太平洋側へ回った。

徐福の身分は方士で、不老長寿の呪術、祈祷、医療、占星術、天文学に通じた学者

(⇒ **月読尊のイメージに良く合う**)

◆徐福の1回目の上陸地は、**若狭湾**



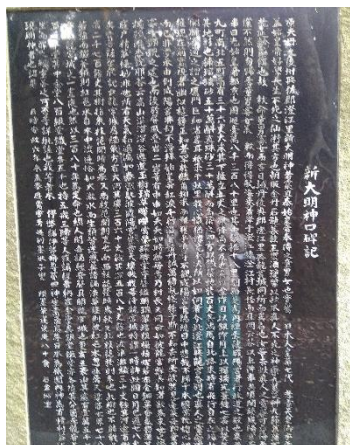
◆新井崎神社（京都府 伊根町）

紀元前 219 年、徐福は不老長寿の薬を求めて、伊根町新井崎に辿り着いた。



(注) 日本書紀では、BC219年を「孝靈天皇」の晩年に重ねて、伯耆山の鬼退治（伝承）を充てている。

新井崎神社（断崖絶壁の上にある）： 近くに稲の棚田「新井の千枚田」がある。



◆徐福の2回目の上陸地は、佐賀



始皇帝は、良家の童男童女三千人と、
五穀（中国では、麻・黍・稷・麦・豆）
の種子とさまざまな分野の技術者を、
徐市（徐福）に託して、旅立たせた。

徐福の名前はジョフク、
エジプト名で言えば**ジョセル**、
英語では**ジョセフ**、
ヘブライ語では**ヨセフ**。

<参照> 物部氏・徐福の謎（飛鳥昭雄著）

徐福が辿ったルート（推定図）



大宜都姫

※土佐に入ったとき、
阿波の大宜都姫に出会っ
たと考えられる。

高天原・剣山に捧げ物を
持ってきたが、
大気都姫に拒否された。

徐福: 伝承[wiki]

徐福に関する伝説は、[中国](#)のほか日本や[朝鮮半島](#)に散在し、内容は地域によって様々であるが、いずれもほとんどが「淮南衡山列伝」の記述に基づいたものである。

日本における伝承

各地に徐福ゆかりの伝承が残されており、特に[熊野](#)の地（現在の[三重県熊野市波田須町](#)）に辿り着いたというものがよく知られている。[波田須](#)付近には徐福ノ宮があり、彼が持参したと伝わる[すり鉢](#)をご神体としている。また、同地からは秦代の貨幣である[秦半両](#)が出土しており、伝説と関連するのではとも言われている。近隣の[和歌山県新宮市](#)には、徐福の墓とされるものが伝わっており、[徐福公園](#)が造られている。

[佐賀県佐賀市](#)の伝承では、同市の金立山に徐福が発見したとされる「フロフキ」という植物が自生する。フロフキは、[カンアオイ](#)（寒葵）の方言名で、地元では俗に「不老不死」が訛ってフロフキになった等ともいい、金立地区ではその昔、根や葉を咳止めとして利用していたという。

[京都府伊根町](#)の伝承では、徐福は同町に辿り着いたとしている。町内にある[新井崎神社](#)付近は[菖蒲](#)や黒節のよもぎなどの薬草が自生しており、徐福はこの地で不老不死の妙薬を探し当てたとされる。高い文化や技術を習得していた徐福は村人に慕われたので、当地に上陸後、故郷に帰ることなく村に滞在したといわれ、近隣で[麻疹](#)が流行して多くの村人が亡くなった際に、徐福を新井崎神社に祀ったところ救われたと伝えられる。現在も同社には徐福が祀られており、所蔵する古文書『[新大明神口碑記](#)』にも彼の事が記されている。

[長野県佐久市](#)の伝承では、徐福は[蓼科山](#)に住んでいた時に双子を儲けたとされ、彼らが遊んだ場所を「双子池」や「双子山」と名付けたという。

他にも[鹿児島県出水市](#)・[いちき串木野市](#)、[宮崎県延岡市](#)、[広島県廿日市市](#)、[愛知県一宮市](#)・[豊川市](#)、[東京都八丈町](#)、[秋田県男鹿市](#)、[青森県中泊町](#)などに伝承が存在する。

中国における伝承

[呉](#)の孫権は、東の海上にある[夷州](#)と[亶州](#)を征服しようとして水軍を送り込んだが敗北した。亶州は秦の徐福が住み着いてその子孫が暮らし、住民は会稽郡東冶県に時々は交易に来ていたという。夷州は台湾説・沖縄説・日本説があり、亶州は海南島説・ルソン島説・沖縄説・種子島説・日本説・済州島説がある。

[釈義楚](#)の[義楚六帖](#)には、徐福が富士山に漂着したことが記され、[顕徳五年](#)（958年）に[弘順大師](#)が「徐福は各五百人の童男童女を連れ、日本の富士山を蓬萊山として永住し」と伝えたという。

[北宋](#)の政治家・詩人である[欧陽脩](#)の『[日本刀歌](#)』には「其先徐福詐秦民 採藥淹留卅童老 百工五種與之居 至今器玩皆精巧（日本人の祖である徐福は秦を欺き、薬を採取して連れて行った若者たちとその地に長らく留まった。連れて行った者の中には各種の技術者が居たため、日本の道具は全て精巧な出来である）」という内容で日本を説明する部分が存在する。

朝鮮における伝承

[朝鮮半島](#)で書かれた『[海東諸国紀](#)』には、（[孝靈天皇](#)の御代に）不老不死の薬を求めて日本の[紀州](#)に来て、そして[崇神天皇](#)の時に死んで神となり、人々に祀られるとある。この記述は、史記において徐福の記事がある始皇帝28年の翌年に、[記紀](#)に書かれる孝靈天皇即位72年を機械的に当てはめて説話を集めたものである。

鬼住山の鬼

[鳥取県伯耆町溝口](#)には孝霊天皇にまつわる日本最古の[鬼退治の伝説](#)がある。[楽楽福神社（ささふくじんじゃ）](#)の由緒縁起によると昔、近くの[鬼住山（きずみやま）](#)を根城にして暴れ回っていた鬼の集団があった。この地を訪れた孝霊天皇は南の笹苞山（さすとやま）に陣を張った。まず笹巻きの団子をついて鬼の兄弟の弟・乙牛蟹をおびき出し矢で射殺した。次に笹の葉を刈り取って山積みして風で飛ばし、兄の大牛蟹たちの体にまわりつかせたうえで火を放った。大牛蟹は蟹のように這いつくばって命乞いをした。大いに喜んだ里人たちは笹の葉で屋根を葺いた神社を作り、これが楽楽福神社の始まりとすることである。天皇はこの地に崩御するまで留まったともいう。

徐福来日

14 世紀の[南北朝時代](#)に成立した『[神皇正統記](#)』によると、[秦](#)の[始皇帝](#)が長生不死の薬を日本に求めたのが孝霊天皇の治世だったとある。日本が海外と関わりを持ったのは[神功皇后](#)の[三韓征伐](#)以後のはずとしながらも、ありえない話ではないとしている。[1471 年](#)に[李氏朝鮮](#)で書かれた[海東諸国記](#)にも孝霊天皇即位 72 年壬午、[秦](#)の[始皇帝](#)に遣わされた[徐福](#)が仙福（不老不死の薬）を求めて[紀伊](#)まで至り、死後に土地の人から神と崇められ祀られたとある。ただし孝霊天皇即位 72 年は[史記](#)で徐福の記事がある始皇帝 28 年の翌年を機械的に当てはめただけのものである。[富士吉田市](#)の『宮下家文書』にも同様の記述があるが『宮下家文書』はいわゆる「[古史古伝](#)」に含まれる部類の書物であり、文体・発音からも江戸後期から近代の作で俗文学の一種と評されており、記述内容についても正統な歴史学者からは認められていない。

孝霊天皇

第 7 代孝霊天皇（こうれいてんのう、正字体：孝靈天皇、孝安天皇 51 年 - 孝霊天皇 76 年 [2 月 8 日](#)）

『[日本書紀](#)』での名は大日本根子彦太瓊天皇。[欠史八代](#)の一人で、実在性については諸説ある。

『[古事記](#)』には大吉備津日子命と若建吉備津日子命による吉備平定が簡潔に書かれている。

[ホツマツタエ](#)（偽書と見られることが多い）によれば、[蓬萊身山（ハラミ山）](#)を[富士山](#)と名付けたという。

<私見>

孝霊天皇の実年代は、初代日巫女と同時代（AD184～204）。書紀の年代引き延しでは、BC290～BC215 に充当。

徐福が最初に来日したのが、BC219 年。丹後半島の伊根に来た頃を、伯耆山の「鬼退治」逸話に充てている。

「楽楽福神社」を徐福神社と見なせば、徐福来日の証しになるだろう。

古事記は、吉備の平定を孝霊天皇時代として鬼退治に関係付けているが、

書紀では、崇神天皇時代（AD248～271 年）の四道將軍による吉備津彦の（西道）派遣となっている。